



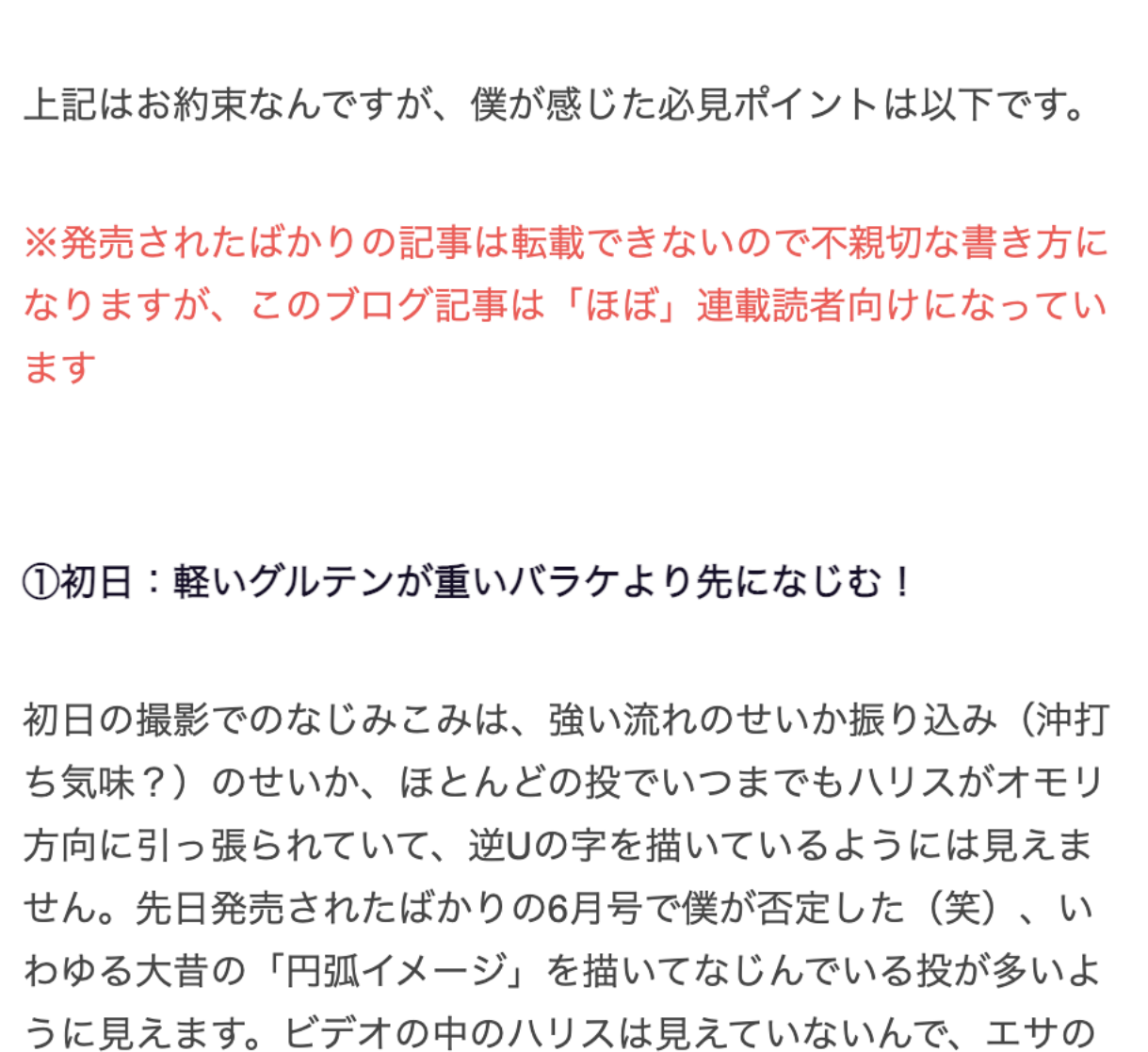
2021年5月8日・ヘラ釣り

昭和のAVみたいな画質の「お宝」ビデオ

Sさんが見つつけてFacebookでシェアしていた動画なんですけど、まだ公開されたばかりなんです。違法アップロードの二オイがするので躊躇っていましたが、これは必見の価値があると思ひ僕も取り上げます。僕的には、内容的にも出演者のにも、「このタイミングでコレかあ！」というくらい。削除されてしまうかもしれないので、興味ある方は早めに観てください。って、これが違法アップロードだとしたら犯罪帮助になるのかな...

でもまあ、35年くらい前のビデオですから、権利者も充分に元を取ったでしょうし、まさかこのコンテンツで現在も収益を上げているとは思えませんのでね。ヘラブナ釣りの未来のためにお許しただけいたら嬉しいなと思います(勝手にですね...)

ビデオの内容は、二日間にわたった西湖での釣りです。



当時の水中ビデオによく見られる、

- アタリ出てないもんですね
- ハリから落ちたエサへは高反応
- きちんとタイミングが合っていてもスッポ抜けカラツンはある

上記はお約束なんですが、僕が感じた必見ポイントは以下です。

※発売されたばかりの記事は転載できないので不親切な書き方になりますが、このブログ記事は「ほぼ」連載読者向けになります

①初日：軽いグルテンが重いバラケより先になじむ！

初日の撮影でのなじみこみは、強い流れのせいか振り込み(沖打ち気味?)のせいか、ほとんどの投でいつまでもハリスがオモリ方向に引っ張られていて、逆Uの字を描いているようには見えません。先日発売されたばかりの6月号で僕が否定した(笑)、いわゆる大昔の「円弧イメージ」を描いてなじんでいる投が多いように見えます。ビデオの中のハリスは見えていないんで、エサの動きからの想像の域を出ませんが、おそらく円弧でしょう。

そして、上バラケより軽いはずの下グルテンが、かなり早い段階でバラケを追い抜いているのがわかると思います。連載に書いた考察である「長い下ハリスの方が加速度が大きいため、上ハリスを追い抜く」のは上下同じエサの場合の話なので、まったく説明が付きません(笑)。これは、「短い上ハリスは下ハリスより先に、真下に行く前にオモリからのブレーキを受ける」ということなんだと思います。乱暴に言えば、「すでに斜めでなじみ切った」ような感じというか。ウキが映ってないので想像でしかありませんが、その時点ですでにかなりの深なじみをしてるんじゃないかな?と。

いつまでもハリスがオモリ方向に引っ張られている場合、下エサより重い上エサでも着順の役に立たないケースがあるということになりますね。いや、もしかすると重いからこそアンカーになるのかもしれませんが。軽くて大エサならきっと同じかと。たいへん勉強になりますね〜。

とはいえ悔しくはないですよ。4月号には「振り切り効果」を書きましたし、6月号では「上下どちらが先か、という着順が重要ではない」と書いています。これについては「最終回で再度触れる(最終回まで既に脱稿)」と予告して6月号を結んでいますが、ネタバレをしますと、上下の役割分担の際に「上&下が」という主語ではなく、「先になじんだ方が&後からなじんだ方が」を主語にしても話を通る推論にしましょう、という話なんです。3月号掲載の元の「不都合な事実」でも、「上から派」、「下から派」、どちらも正しい可能性を示唆しています。

これ、論理破綻を恐れて用意しておいた「逃げ」じゃないんです。このビデオに6月号をひっくり返される前に書いてますから、もちろんこのビデオからの逃げでもありません(笑)。そもそも、「短いハリスの沈下速度は速い」からヘラブナは「追えない」を、ひっくり返すために触れただけであって、「長いハリスの方が沈下速度が速い」解説をしたかっただけでした。「追える追えないはオモリで決まる」とした現在、ぶっちゃけ加速度も着順もどうでも良いんですよ。いえ、連載では最終回までそれなりに登場しますけどね。

O副編集長からの質問をダシに、「番外編」として大昔の円弧イメージを解説した6月号ですが、7月号以降大きくストーリーに関わってきます。あり得ないとしながらも「目指す」のです(あ〜ネタバレ)。5月号のラストでは、僕の動画をヒントにし、それまでの記事を7月号で一部ひっくり返すと予告があります。実際は番外編の6月号もひっくり返そうとするんですね。僕自身の手で。

ですが、この①のようなオモリにハリスを引っ張らせるアプローチではなく、連載のテーマはハリス論ですから「ハリスで(もちろん短ハリスで)何とかしようぜ」という展開になっていきます。①も盛り込みたい欲はありましたが、さすがに同時進行は情報過多だと諦めました。でももし底釣り編を書くことになれば、そこで書こう、と。※ビデオは底釣りですが(笑)

実は最終回は底釣り編への布石です。原稿の冒頭に登場する、「本文と関係があるのはわかるけど、直接どの部分を補足説明してるの?」な図なんかは特に。伏線ではなく布石です。だって、連載でしょっちゅう「底釣りを解説する機会があれば...」って書いてきてますから。

▶「伏線」・・・物語で後で起こることを予めほのめかすこと。

▶「布石」・・・将来のための用意をすること。先々に備えて予め打たれた手くばり

「布石」と「伏線」は、あらかじめ何かを行う点では似ています。しかし、布石は「将来に備える準備」であるのに対して、伏線は「あとで起こる出来事についての予告」であるという決定的な違いがあります。

ありゃ?底釣り記事の執筆は確定じゃないんで、伏線たりえないのや。まあいいや(笑)。書く場合には使える準備としてなので、最終回に対して布石と呼ぶのは合ってますね。まあとりあえず進めましょう。まだ①ですから。

②二日目：重いバラケが軽いグルテンより先になじむ

二日目の撮影は、落とし込みが効いた投が多いです。長い下ハリスの加速度も、バラケの重さから来る加速度には抗えず、上ハリスが先になじみ切ります。後から映り込んでくるオモリとの位置関係(近さ)で見ても、オモリから開放されたフリーフォールの間は間違いないでしょう。ハリスは見えませんが、きちんと逆Uの字を描いている筈です。二日目に限っては、6月号と矛盾しません。

③時代時代の視点

初日は①で書いたようにほとんどの投で下ハリスからなじみきるにもかわらず、この事象にはスルーというのが「当時の視点」だと思います。それに対して二日目のカメラマンは、②に対して「上ハリスから先になじむのが当たり前」というコンセンサスが得られている時代だと窺わせるガリフを吐きます。初日の事象は目が切り取らなかつたのか、無視したのかはわかりません。初日は円弧イメージだけを切り取ったのかもしれないですね。だとすれば二日目のなじみ方に疑問を持ってもよいのですが、「着順は合っている(上ハリスからなじんでいる)」から気にならなかつたのかもしれない。このビデオは初見ですが、もしリアルタイムに観ていたら、僕も気にならなかつたんじゃないかと思ひます。それが洗脳です。

6月号の図Aは「あり得ない」として笑っていますが、底釣りで僕も良くやる「かなりの沖打ち」を選択した場合に、実現する可能性があることを示すのが①初日の撮影ですね。図Aが成立するのであれば、加速度云々ではなく、図Bの「メカ」で下バリが先に着底します(本来の図Aは上バリからの着底モデルとして世に出ました。6月号で僕は、実は下バリからの着底を示していると指摘しています。それが図Bです)。上下のハリスの位置が逆転した図Cだったら尚更です。とはいえビデオの初日は完全に図Bですね。上ハリスが初期段階では下にいます。これはバラケが重いことに起因するのかもしれない。

「実は下ハリスから先になじむらしいよ?」とドヤるのが、流行を先取りする現代の意識高い系アングラーだと思いますが、カタチだけで覚えてしまうのが危険なんですね。カタチだけで覚えてしまえば、①で疑問に感じず、②に疑問を感じるわけでしょう?それじゃあ二日目のカメラマンと立ち位置が逆になっただけです。加速度、エサの重さ、オモリ量(7月号で触れます)、ラインテンション(振り込み方も含む)、すべてが揃って着順が決まります。ヘラブナのアオリがあれば全て台無しですが(笑)

最終回では「落とし込み」に困われた現代ヘラ師の迷走に触れますが、「大量のヘラブナを蹂躞す」以外の落とし込みのメリットについてはバカじゃねえ。さらに、「魚影が薄いなら落とし込みなんて良いんじゃないやね?」とまで書いていますが、多くの方が違和感を覚えずに読み進めてしまうと予測しています。

理由は7月号に登場しますが、「底釣りでの超短ハリスは特殊(ほとんどやらない、成立しない、という意味)」だと第1回(1・2月合併号)に書きました。「ハリスで(もちろん短ハリスで)何とかしようぜ」が封じられていることにもなります。だから「①のようなアプローチ」が底釣りでは生きてくるんですね。

「沖打ち」を深堀りしてはじめて「落とし込み」のメリットが完全に切り取られます。両者のダメな時(デメリット)が相手の使えどき(メリット)になるからです。もちろん逆から深堀りでも構いませんが、ハリス論との同時進行は見送ったのは、さきほど書いた通りです。

一冊でまとめてバーン!と出せないのは僕だって歯がゆいんですよ。宙の短ハリスだけでもそうなんです。自己否定(ひっくり返し)の連続です。途中だけ読まれてしまうと「こいつバカじゃね?」になってしまうかもしれないわけですから、底釣りも視野に入れたら「壮大な未完成」になると知りつつ書くわけです。

だからといって、「連載が全部終わるまで読まないでね〜。一気に通貫で全部読んでね〜」とは言えないですからね。途中で打ちきりになるかもしれないわけですし。せいぜいこんなブログ記事を書くくらいしかできません。精一杯です。(現時点ではもしかしら、この記事にだって書けないことがあるのかもしれないよ?)

先月、地元の釣り堀でピギナー二人と出会いましたが、はじめて見る超短ハリスに驚いていました。彼らは僕のことなんか当然知らないわけですが、僕はふだん「超短ハリスは初心者向け」だと力説する割には、「ヘンテコな釣りでしょ〜(汗)」としか言えなかつたんですね。

もしピギナーが当たり前のように短ハリスから入門する時代が来るとしても、まだまだ数十年単位の時間がかかるでしょう。まずは易しい釣りだと理解できる指導者がたくさん必要で、現在は中級者以上の方を啓発するしかないんです。それこそ、「壮大な未完成」に身を投じていることになります。死ぬまでに僕にできることは超短ハリスの地位向上くらいで、10センチ未満のハリスが普通に紹介される入門書を見ることは叶わないと思ひます。

④当時のタックル

最後のオマケ的に出てくる、「八街上水湖」での釣り。時代を感じさせるのは名竿「二天粋」だけではなく、メーターでチョイスするウキが7ミリ径の羽根一本取りでボディ14センチ(たぶん3センチ前後の足込み)、最近見なくなった浅いタモ。ちなみに僕はよく「やっちゃった上水湖!」と言ってスベってますが、その駄洒落のベースとなった管理池ですね。最近のヘラ師で池の存在さえ知らなければ、スベる以前の話です。

総括。

両日もほとんどの投で「最初からオモリが映っていない」ところが残念ですが、常識的なハリスの長さで定点カメラの撮影であれば、ワンフレームに収めることは難しいでしょう。これも、水中映像が机上の理論との矛盾を炙り出してこなかった理由のひとつです。

それにしても浜田さんは流石ですね。ビデオの中では、下バリを小さくするんじゃないで大きくすべきという提案をしています。僕が出会う前の浜田さんは恐ろしく若いです。まだ30代だと思ひます。ビデオに出てくる二天粋や天弓の発売当時、僕は高校生だったと思ひますから、まだヘラ釣りは再開してないですね。そんな時間を越えて、5月号ではインタビュー記事を執筆したばかりです。インタビュー記事と短ハリス連載はさすがにリンクしないと思ひていましたが、YouTubeからのこの展開ですもん。驚きです。

オマケ。

リンクといえば、今月は記事をもう一本書いています。こちらは同じ6月号の短ハリス連載と完全にリンクしていますので、ぜひ読んでいただければと思います。

「タナ=泳層」でも以下のバリエーションがある
①純粋に魚がいる層(位置)
②魚が捕食行為を行う層(位置)
③釣りが魚にエサを食わせたいと考える層(位置)

58:21:51追加しました。水色部分です。